



再発見

紀宝町

海・山・川の自然に恵まれた
いにしへのロマンに出会える町

ふるさと再発見の第二十回目は、紀宝町です。

紀伊半島の南東部に位置するこの町は、

東は熊野灘に面し、南の和歌山県との県境には熊野川が流れ、はるか昔から、海・山・川の自然とともに歴史を紡いできました。

町に残る文化財や遺跡の数々、文化的景観が遠い昔を物語っています。

また、平成16年に、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」として

登録された地域でもあります。

今回は、清らかな自然といにしへのロマンが薫る町の魅力をお伝えします。



※印の写真は取材先から提供していただきました

ウミガメが産卵で上陸する 美しく恵まれた自然環境

国道42号線を南下して紀宝町に入ると、今回の旅の出発点、道の駅 紀宝町ウミガメ公園があります。目の前の井田海岸には、5月下旬から8月上旬にかけて、

アカウミガメが産卵のためにやってきます。そのため紀宝町では、町をあげてウミガメと環境の保護に取り組んでいます。ここでは、ウミガメの生態や取組みの様子を紹介。また、施設内のプールで保護されているウミガメを、間近で見ることが出来ます。



道の駅 紀宝町ウミガメ公園では、ウミガメに餌やりができる



きれいな砂浜が続く七里御浜

さらに南へ、海岸沿いに下ります。熊野市から紀宝町にかけての浜は七里御浜と呼ばれ、町が誇る世界遺産の一つです。熊野古道伊勢路の一部「浜街道」と呼ばれ、信仰の道としての役割を果たしてきました。色がきれいな丸い小石に覆われ、「日本の渚百選」に選ばれた美しい浜です。

いにしへの信仰の様子をとどめ 神秘が薫る神内地区

国道42号線が海岸から離れると、最初の目的地、神内地区に近づきます。熊野市消防署紀宝分署がある交差点を北へ向かうと、のどかな山里の風景が現れます。ここ神内地区は、古代信仰の遺跡が

神内地区には、見どころを示す道標がいたるところに立っています。案内に従い、古神殿へと向かいます。ゴツゴツとした小高い山の岩屋は、原始時代の神殿と伝えられ、祭事が行われていたとされています。また、近くにある神内神社の本宮ともいわれています。さらに奥へ進むと、神内神社があります。由緒には、伊弉諾

尊と伊弉冉尊が天から降り、一男二女をもうけたとあります。古くから子安の宮と呼ばれ、安産祈願の神社として信仰されてきました。自然岩の岩窟を御神体とし、当時の人々の自然崇拜の有様を今に伝えています。境内には、ホルトノキが年月をかけ大石を巻き込み、わが子のようには抱く「安産樹」もあります。巨樹や巨岩に囲まれ、時が止まったかのような厳かな空間。神秘の力を感じずにはいられません。

来た道を戻

り、延命地藏へ足を運びます。別名「滝の地藏」とも

呼ばれ、滝が流れる奇岩の岩屋に祠があります。片膝を立てる姿は、すぐに村の人々を助けに行くためとい



遠くからでも絶壁がわかる鷹の巣倉



大小の岩が重なり合う古神殿



神内神社。左に見える巨岩がご神体



岩屋の奥に祠がある延命地藏



永年かけて岩を巻き込んだ「安産樹」



熊野川で行われる「御船祭」の様子※



熊野川の中にある大きな岩山が昼嶋。昼嶋にわたると碁盤の目が見える

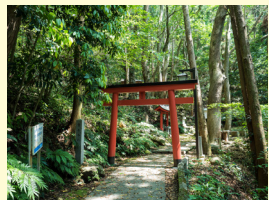


石垣の上に家が建つ浅里地区



飛雪の滝は、滝壺の水際まで近づける

みどころ **ちょっと足を延ばして。**
貴祢谷社(きねがだにしゃ)
 鵜殿城址から、さらに遊歩道を10分ほど進むと、山の中に社(やしろ)が現れます。諸国を遍歴(へんれき)した熊野三山の神が、本宮と新宮に遷(うつ)される前、ここに祀(まつ)られます。



ひっそりと佇む社の鳥居

悠久の歴史を刻む 緑深い熊野川沿いに行く

三重県と和歌山県の間を流れる熊野川は、熊野三山を結ぶ「川の参詣道」として世界遺産に登録されています。また、かつては生活物資を運ぶ水上交通の役目も果たしてきました。川と並行する県道740号線を、上流へ進みます。最初の見どころは、世界遺産でもある御船島(みふねしま)です。川の中にあるこの島は、対岸の和歌

山にある熊野速玉大社(はやたま)の月(つき)の「御船祭(みふねまつり)」では、神幸船(しんこうぶね)の渡御(わたご)にあわせ、島の周りで早船(はやぶね)の競漕(ひらけ)が行われます。さらに行くと、昼嶋(ひるしま)があります。岩の上部に碁盤(碁)の目のような筋(すじ)があり、熊野権現(くまのぐんげん)がここで昼食(ひるめし)をとり、天照大御神(あまてらすおみかみ)と碁(碁)を楽しんだとの伝説(でんせつ)があります。川沿いに駐車スペースがあるので、熊野川の景色(けいせき)をゆっくり眺(なが)めることができます。ここから県道(けんどう)は川(がわ)を離(はな)れ、浅里地区(あさり)に入(い)ります。かつては、川舟(がわふね)を交通手段(こうつうしゅだん)としていた川(がわ)の里(さと)です。「山の斜面(さか)に身を寄せ合うように築(た)かれた石垣(いしがき)集落(しゅうらく)と、水田(みづうで)も調和(てんわ)がとれている」と評(ひょう)され、「にほんの里(さと)100選(せん)」に選(えら)ばれました。

紀宝町の自然と歴史をたどる旅もここで終了。県道740号線を折り返し、帰路(かへりみち)につきます。行き道(ゆきみち)とは違(ちが)う、熊野川(くまのがわ)の風景(けいせき)に出会(であ)えるかもしれません。

くられた展望台(ていざんたい)は、町のビューポイント。鵜殿(うで)の街並(まちなみ)や、熊野川(くまのがわ)をはさみ対岸(たいがん)の新宮市(しんみやうし)、熊野灘(くまのなみ)まで一望(いちぼう)できる爽快(すわい)な景色(けいせき)が楽しめます。

山(やま)にある熊野速玉大社(くまのはやたま)の月(つき)の「御船祭(みふねまつり)」では、神幸船(しんこうぶね)の渡御(わたご)にあわせ、島の周(まわり)りで早船(はやぶね)の競漕(ひらけ)が行(い)われます。さらに行(い)くと、昼嶋(ひるしま)があります。岩(い)の上部(じょうぶ)に碁盤(碁)の目(め)のような筋(すじ)があり、熊野権現(くまのぐんげん)がこ(こ)で昼食(ひるめし)をとり、天照大御神(あまてらすおみかみ)と碁(碁)を楽し(たの)んだとの伝説(でんせつ)があります。川沿(がわ)いに駐(と)車(しや)スペースがあるの(の)で、熊野川(くまのがわ)の景(けい)色(しき)をゆ(ゆる)かり眺(なが)めること(こと)がで(こ)きます。



土壁(つちかき)の様(よう)子がわかる鵜殿城址(うでじょう)

View Point 鵜殿城址の展望台(ていざんたい)から、紀宝町(きほうちやう)の街並(まちなみ)を一(いち)望(ぼう)。右(みぎ)に熊野川(くまのがわ)が見(み)える

遠(とほ)い昔(むかし)の面影(おもかげ)を残(のこ)す
街中(まちなか)の立ち寄り(たちよ)スポット
 神内地区(かみうち)を後(ご)に南(みなみ)へ下(くだ)ると、街(まち)の中心(ちゆうしん)地(ち)・鵜殿地区(うで)に入り(い)ります。熊野川(くまのがわ)の河口(がわぐち)近く(ちかく)に、鳥止野神社(とりどの)があります。境内(けいん)には70種(しちじゅう)の植物(しょくぶつ)が自生(じせい)し、自然林(しぜんりん)の成(なり)り立ち(たち)を知る(しる)うえで貴重(きんじゆう)な林地(りんち)のこと(こと)。オガタモノキ、イヌノキなどの大木(おほき)が、神社(じんじゃ)を守る(まも)るか(か)のように立(た)っています。境内(けいん)の横(よこ)に、小山(こやま)へのぼる遊歩道(ゆうぽだう)があります。しばらくのぼると、鎌倉時代(かまくらじだい)に鵜殿氏(うでどの)が築(た)いた鵜殿城(うでどのじやう)趾(し)が現(あら)われます。土(つち)を盛(も)つた砦(とりで)である土壘(つちかき)が巡(めぐ)らされ、当時の山城(やましろ)の特(とく)徴(てい)がはつきり(つきり)と見(み)えとれ(と)れます。横(よこ)につ



大木(おほき)が生(い)い茂(さ)る鳥止野神社(とりどの)

●表紙写真当時の様子を再現する宝塚1号墳(松阪市)